

勉強はできるのに親しい友だちがなく、昼の休みに校庭の隅にある鉄棒に一人ぶらさがって時間をつぶす。自分に悪いところは無い、遊ぼうとしない級友が悪いんだ、とつぶやく。



日本は孤立している。正確には日本という国家がアジアの中で孤立してしまっているというべきか。いまのような状況を名譽ある孤立のごとく唱えるナシヨナリズムの台頭がみられる。深刻なのは孤立状態にあることは認めつつも、だからどうだというのだ、と居直る風潮が出てきたことだ。

「日米同盟関係が強固であれば、日中も日韓もすべてうまくいく」というのが小泉純一郎首相の論理である。その日米関係そのものがいささか怪しくなってきた。プッシュ大統領と小泉首相との首脳同士の関係は依然として良好だろうが、個別の案件では米軍再編問題などに見られるように日米間の齟齬(そご)が目につく。

プッシュ政権が期待したのは、極東アジアのことは日本にまかせておけば安心、というような役割分担であった。日本がその責務を果たしてくれば、米國は中東などの地域に集中できる。ところが日本はトランプシューター(紛争の調停役)どころかトランプ

本社客員コラムニスト 田勢 康弘

# 忘れられた「隣交」戦略

## 核心

メーカー(問題児)になってしまっている。小泉政権も初めのうちはそれほどかたくななわけでもなかった。外交の専門家を集めた「対外関係タスクフォース」という諮問機関を設けたほどだ。

外交評論家の岡本行夫氏ら九人のメンバーは「二十一世紀日本外交の基本戦略」を二〇〇二年十一月にまとめた。この中で「今後

としての明確な戦略の策定が必要だが、これまではそれを欠いてきた」と述べている。その上で首相に中長期の外交指針を建言するた

め「外交安全保障戦略会議」の設置を提言した。しかし、いまに至るまでそのような会議は設置されず、そのような提言が行われたことすら忘れられている。もう一つ忘れられている提言がある。小淵恵三首相のときに発表された「二十一

世紀日本の構想」(河合肇雄座長)である。この中の「世界に生きる日本」に書いてあることはいまの日本にもっとも必要なことである。とくに中国、韓国との関係についての提言は傾聴に値する。

「日本と韓国・中国との関係は、単に外交という名で呼ぶには足りない。その関係は外交と呼ぶにはあまりにも深く、にもかかわらず、十分に深まっているとはいえない。外交的な努力だけではつかみきれないものをすくいとり、深みのある関係を築く営みが必要である。そういう営みを『隣交』と呼ぶことにしたい」

戦後の長い間の官民合作せた地道な努力の積み重ね

## アジアでどう生きるのか



大型連休の外遊は隣交ではなくもっぱら「遠交」だった(4月29日、エチオピアに到着した小泉首相)＝共同

も、現状では水の泡に終わってしまう恐れがある。外交の極致は「道徳的優位性」にあるという。すなわち、あの国やあの国の人々の立派さにはとてもかなわな

い、と相手の国の人々が思うような外交、国のあり方が最高なのだ。いまの日本はその逆である。こちらに非はない、悪いのは国内政治上の戦略で日本を悪者にしている相手の国だ、とつぶやいている。

首相の靖国神社参拝がなくなったとしても、中韓両国との関係は急速には回復しないというはその通りだろう。次から次へと靖国に代わる難問を突きつけてくるというのも、その通りかもしれない。しかしながら、だからといって腕組みしているだけでは何も解決しない。歴史認識や靖国問

題にさほど関心のないアジア各国の一般の人々に日本に対する不信の輪を広げるだけだ。冷戦構造崩壊後、世界秩序は劇的な変貌(へんぼう)を遂げた。その中で日本はどのような国として生きてゆくのか。何のために、だれが外交のリーダーシップを取るのか。その戦略がまったくない。したがって常に崩壊的に国家の針路が決められていくような危うさを感じる。戦

略がないから世界へメッセージを発信することもできない。外交に戦略を持たぬ國が尊敬の対象になるはずがない。閉塞(へいそく)状況にあることは多くの人が認めながら、与党ばかりか野党の政治家の危機感も薄かったといわざるを得ない。もとより、国民レベルの危機感の低さは衆院選挙でまったく争点にならなかったことでもわかる。われわれは引越すことができない。いつまでも隣の国と付き合っていかなければならない。そればかりか、いい関係を築いていかなければ生きていけないほど深い関係にある。政治指導者の「心の問題」でトップ同士の会談が行われないでいるというような不正常な状態を放置しておくわけにはいかない。

日米同盟を堅牢(けんろう)なものにするには、東アジア地域での関係を良くすることなのだ。アジアで日本がどう生きるかは、秋の自民党総裁選の争点などという矮小(わいしょう)なものではない。百年後の日本を決めるテーマなのである。

筆者は早稲田大学大学院教授に就任しました。今後は本社客員コラムニストとして本紙に執筆します。